
高校内乱

波島祐一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校内乱

【著者名】

波島祐一

N9680Q

【あらすじ】

治安の悪化した日本では、高校生で構成されるSDFと呼ばれる防衛組織が設立され、高校の治安維持と生徒の保護を担っていた。SDFの中でもエリート精銳部隊であるSSTの隊員・緒方孝は、チームメイトの中原葵をはじめとする仲間たちと、勉学と訓練、そして戦闘に明け暮れる高校生活を送っている。銃犯罪に満ちた日本で、彼らは正義を貫くために戦う。

第一話・始業式（前書き）

この小説は「高校戦争（<http://ncode-syosetu.com/no275h/>）」の続きです。
初見の方はまずそちらをご覧下さい。

第一話・始業式

澄み切った青空のもと、おがたたかし緒方孝は通学路を歩き始めた。

一億五千万キロメートルの彼方から降り注ぐ陽光は、肌寒い朝の冷気との相乗効果で物の輪郭を明瞭に見せていく。この辺に高層建築の類はなく、あるのは住宅や店舗、高くてもせいぜい五階建てのオフィスビルのみ。視線を遠くに伸ばせば、都市中心部の瀟洒な摩天楼が霞に包まれてぼんやり見えた。

今日は春休み明けの始業式。孝は高校一年生になる。誰でもそうなのだろうが、孝も期待と不安の入り混じった気分だつた。何となく気分が良く、新しいクラスは何組だろう、クラスメイトは誰だろうなどと、つれづれ徒然に考えながら歩いていた。

車一台通るのがやつとの狭い路地から大通りに出ると、学校の前を通る路線バスのライトグリーンの車体が孝を追い越して行つた。新学期早々、超満員のすし詰め状態だ。このバスを見るたび、住んでいるマンションが学校の近くで良かつたとつくづく思う。

「緒方…」

振り向くと、同じ学年の中原葵なかはらあおいが小走りに近づいてきた。「おは

」

「おはよう。……なんか、いつもと雰囲気違うな

孝は葵の顔をじっと見つめた。整った目鼻はいつも通りだが、髪が違つた。背中まであつた艶のある黒髪が、肩に少しかかるくらいでカットされていた。

「ちょっと、切つてみた」

少し恥ずかしそうに目を逸らし、自分の髪を押さえる葵。その表情は、一年前より大人らしくなっている気がした。知らぬ間に見惚れていた孝は、慌てて視線を前に戻し、「似合ってるよ」と言つておいた。

「ありがとう」　　葵は小さく言つて、嬉しそうに笑つた。

その後、坂丘高校に着いた二人は、校舎に隣接したSDF棟に入った。SDF棟は二階建てで、通常の校舎とは分離している。銃器が保管されているためセキュリティは通常の校舎とは一線を画しており、入るにはIDカードが必要だつた。

廊下を進み、突き当たりにあるSST室のドアにIDカードをかざすと、自動でロックが解除された。中には渡瀬智久わたせともひさと二沢理香みさわりかがいた。一人は今日から三年だ。

「おはようございます」　孝と葵が同時に言つた。

「おはよう」　　渡瀬はそのままSST室を後にした。

「おはよー。お、新学期からツーショット登校ですかお一人さん？」　悪戯っぽい笑みを浮かべた理香が、SST室で飼つている柴犬のテツを抱えたまま言つた。

「そこで偶然会つたんですよ」　孝が言つと、葵も「……そうそう。たまたまです」　と調子を合わせる。

「隠さないでいいのに」　　と葵の頬をつづいた理香が葵と話始めたので、孝はSST室にある武器庫に入った。自分のラックからシグザウアーP226自動拳銃を取り、弱装弾が十五発込められた弾倉をP226のグリップに押しこむ。それと予備弾倉を一本、

三段階伸縮式の特殊警棒を腰のホルスターに入れた。

武器の携帯は、校内の治安維持と生徒の保護を国から委託された存在であるSDF隊員のみに認められた、特別な権利だ。

孝と同じように装備を整えた葵と、生徒玄関に向かった。生徒玄関はクラス分けの掲示を見に来た生徒でごった返している。なんとか掲示板の前まで行き、クラス名簿を見る。孝は苗字が緒方なので、自分の名前を探しやすい。案の定、すぐに見つかった。

「A組、か」

「緒方も？」 あたしもA組」

「じゃあ一年間クラスメイトか。よろしく」

「うん、よろしくね」

「あ、葵！ また同じクラスだね」 孝の知らない女子が葵に話しかけた。そのまま話しかけたので、孝は一人で教室に向かう。

「よ、緒方」 同じ中学出身で、去年も同じクラスだった山崎雄一^{まさきゆうじ}が、A組の窓際に立っていた。その隣には、やはり去年同じクラスだった宗像杏子^{むなかたきょうこ}と内田美菜^{うちだみな}がいた。「あ、緒方じやん」「おはよっ、緒方くん」

「おはよっ……つてみんなA組？」

孝が驚くと、三人は頷いた。すると、教室に誰かが入ってきた。葵だった。

「緒方一、黙つて先に行かないでよ」

不満そうな表情の葵が

歩いて来た。そして三人に気づく。「えと、緒方のお友達?」

「ああ」

「あたし、中原葵つていいます。よろしく」ペニシリと頭を下げる葵。三人もそれぞれ自己紹介をした。女子三人が趣味の話をしているとき、山崎が孝を肘でつついた。「おい

「ん?」

「緒方、中原さんどどいう関係なんだよ?」

「どういう……って、同じSSTのチームメイトだけ。山崎、中原のこと知つてたのか?」

「知つてるも何も……中原さん、めっちゃ美人だから校内で有名なんだぜ?」

初耳だった。山崎はまだ何か言おうとしていたが、チャイムが鳴り、同時に新しい担任が教室に入つて來たので、生徒たちはそれぞれ席についた。

入学式と始業式が終わったあと、ホームルームで席替えを行つた。結果、孝は窓側後ろから一番目といつ快適なポジションを得た。

が。

「……またおまえか

前の席には山崎。実を言つと、去年も長い期間、山崎が孝の前の座席だつたのだ。

「……縁があるのかもな、おれたが」

「気味の悪いことを言つたなー。」 孝は思わず怒鳴つた。

今日は授業がなく、昼前に解散となつた。

「お隣だね、緒方」

なぜか隣の席になつた葵がこちらを見て笑つた。純粋に嬉しそうな笑顔だった。

それを見て一ヤけていた山崎の顔面に裏拳を叩き込んだのは、杏子。

「いっでええ！」 涙目で鼻を抑える山崎。「なにじやがるー。」

鼻声だった。

杏子はにじやかに「いめん、手が滑つた」と誤魔化した。

手が滑つた……？ 手が滑つて顔面に裏拳が直撃するのか……？

ひどい理由だ。確かに悪いのは山崎だが。

杏子は颯爽とポニー テールを揺らしながら、美菜と共に教室から出ていった。

「よつと待てふざげんなー。」

鼻を真つ赤にした山崎が慌ててその後を追つ背中を見て、葵がくすくす笑つた。

「変わつた人たちだね」

「文部通り変人だから、中原も気をつけた方がいい」「そりなの？」　葵は吹き出して笑った。

SDF隊員は午後に一年生の入隊式があるので、孝と葵は教室で昼食を食べ、多目的ホールに向かつた。

「敬礼！」

ホールの全員が敬礼した。右手をこめかみに持つてくる、警察や軍隊でお馴染みの形式である。

ホールの中央で新品の制服を着ているのは、坂丘高校SDFの新入隊員一三三名。SDF隊員は一般的の制服ではなく、SDFの制服を着用する規則となつていて、白いシャツにネイビーのスラックス・ブレザーという基本は一般的の生徒と同じだが、違うのはSDFのエンブレムと徽章、階級章がついていることだ、ここにいる新入隊員は全員が最も下の三等学士。このあとの訓練で一等学士か二等学士に振り分けられ、その後は隨時階級が上がる。

孝や葵は学曹長で、幹部である三等学尉の一歩手前だつた。一年生にもかかわらず階級が高いのは、少数精銳のエリート部隊SSTの隊員だからで、SSTでなければ、幹部まで行けるのは小隊長など一握りだ。

「かわいいね、一年生」　校長が無駄に長い訓示をしているとき、孝の隣に整列している葵が言つた。

「ああ。……でも、一年前はおれたちもあそこにいたんだよな」「うん……一年つて早いね」

なじみを含むことなく、入隊式は終わった。

孝と葵がSST室に戻るため廊下を歩いていた。「お姉ちゃん！」と、この声が背後で弾けた。駆け寄ってきた小柄な女子生徒に、葵は「あら、歩」と返す。

歩と呼ばれた女子は身長が葵より少し小さめが、整った顔立ちは葵に似てなくもない。髪は長いツインテール。SDFの制服を着ていた。

「中原……妹？」妹がいるとは聞いていたが、まさか同じ高校に入っているとは。

「うん」

「似てるね」

「……歩？」

すると、歩は孝に不思議そうな視線を向ける。「……誰？」

「同級生の緒方孝くん」葵が紹介してくれた。

歩は合点がいった、と、ついふつに手を叩く。

「ああ、あなたが緒方さんでしたか。お姉ちゃんからよく話を……」

突如、葵が歩の口を手で塞いだ。「なんでもないの、気にしないで！」なぜか顔を紅潮させる葵。口ぶりからして、この妹は孝を知っているようだったが……。

歩は苦しそうに葵の手を口せり引き剥がす。「何すんの、お姉ちゃん……！」

孝は歩が何を言おうとしたのか気になつた。

「えっと……歩ちゃん？ わきなんて……」

「あんなバカ！」

顔の赤い葵が怒鳴った。珍しい。

そのとき、廊下の奥で女子生徒が歩を呼んだ。

「じゃあ、あたしはこれで……」 歩は屈託のない笑顔を孝に向けた。「お姉ちゃんの」とよろしくお願いしますね。……いろんな意味で」

「え？」

意味深な言葉を残し、歩は廊下の奥へと駆けて行った。葵と歩は性格が少し違うようだ。

孝は隣で俯き肩を震わせている葵を見た。顔は髪のせいでよく見えなかつた。

「……妹におれのこと何て言つたの？」

「教えてあげてもいいけど……」 そう言つてひびきを見返し

た葵は、ぞつとするほど優しげな笑みを浮かべていた。

「ただし、聞いたあと記憶を消させてね？」

葵の右手は腰のホルスターに収まつたP226のグリップを握つていた。

記憶つて銃で消せるのか……？

「……やつぱいです」

「よろしく」

葵はグリップから手を離し、機嫌良さげに鼻歌を歌いながら、SST室に向かつて歩いて行つた。

退屈しない日々が始まつた、と孝は心中に呟いた。

第一話・始業式（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
ご意見・ご感想お待ちしています。

SDF、SSTなど用語の詳細は前作「高校戦争（<http://nocode.syosetu.com/n0275h/>）」の方を
参照ください。

第一話・戦闘

SDFの隊員は、戦闘職種と事務職種に分かれている。前者は暴動の鎮圧や侵入者の排除などを担当し、後者は警備ローテーションの作成などデスクワークを担当する。

事務職種の仕事のひとつとして、監視業務がある。

始業式の翌日。

今は三限目の半ばだが、監視業務に就いている一年生の女子生徒一人は、SDF棟の監視室で談笑していた。

突然、警報が鳴り響く。一人がモニターに映し出された監視カメラの映像を見ると、数人の男が生徒玄関の抗弾ガラスを銃で破壊しようとしていた。他にも十人ほどいる。

一人が慌ててマイクをとり、全校放送のスイッチを入れた。

侵入者発見の放送を受けたSDF隊員がSDF棟に集合した。一年生の新人はまだ戦力にならないので、二年と三年だけだ。

SST室では、八人の隊員が装備を身につけていた。

すでに黒い戦闘服に着替え、ボディアーマーをつけた岡田清一が隣の渡瀬に問う。

「メインはM4の方がいいか?」「短機関銃で武装しているらしいからな、そうしよう

ヘルメットをつけた渡瀬は武器庫に入つた。

ラックから自分のM4A1自動小銃を取り出し、五・五六

ミリ弱装弾が三十発入った弾倉を入れてチャージングハンドルを引く。金属音が響いて初弾がチャンバーに送られた。

「プラボーが現場に向かう。アルファは待機だ」 プラボーチーム班長の渡瀬が告げ、孝たちプラボーチームはM4を携えてSST室を出た。

生徒玄関では、「銃を捨てなさい！」と怒声が響いていた。常時警備の隊員だろう、二人のSDF隊員が抗弾ガラスの向こうにいるヤンキー風の男たちと対峙している。

一人が構えるMP5短機関銃に臆せず、男たちは銃を抗弾ガラスに向けて発砲し続ける。

そして、耐えきれなくなつた抗弾ガラスが音を立てて割れた。一瞬、身を引いた一人のSDF隊員は、正面に立つた大柄な男たちに蹴り飛ばされて後方に弾けた。

男たちは、ロッカーにぶつかつて倒れた一人に各自の銃を突きつけた。

四発の銃声が響き、一発ずつをボディアーマーに撃ち込まれた一人はあまりの痛みに呻き声を上げる。ボディアーマー越しで、弱装弾であつても、至近距離で撃たれれば骨くらいは簡単に折れる。

「やっぱSDFなんて大したことねえな」 大柄な男が言った。周りの男たちは笑う。

ちょうどそこに、五人のSST隊員と十三人の普通隊員が駆けつけた。

それに向けて、男の一人がステアーツMP短機関銃を連射する。暴力的な発砲音と共に、輝く空薬莢が床に撒き散らされた。

突然の発砲に、隊員たちは慌ててロッカーの陰に退避した。

「逃げないで学生ちゃん」 気味の悪い声で言った男がさらにTMPを撃つた。数発が、生徒の私物などが入ったロッカーに命中する。

そのロッカーの陰で、佐伯が呟くように言った。

「あれは……ヤクザか暴力団の腕試し部隊かな」

「だろうな」と渡瀬。「よし、緒方と中原は連中の横に回り込め」

「了解」

孝は葵と廊下を走って移動した。

腕試し部隊。自分たちの戦闘力を試すため、あるいは銃の乱射を愉しむため、わざわざ高校にやって来てSDFと戦火を交える大人たち。高校生や教師にとつては至極迷惑な連中である。

「連中のサブマシンガンが弾切れになつたら行くぞ」

渡瀬と佐伯はM4のセレクターレバーをセミオートに切り替えた。その近くでMP5を構える普通隊員たちも、射撃用意を整える。

『緒方、準備はいいか?』 骨伝導式イヤホンから渡瀬の声が発した。

「いつでも」

孝と葵は生徒玄関の隅で、こちらには気づいていない男たちに向けてM4の射撃姿勢をとった。ドットサイトを覗き、赤い点を男の足に重ねる。

『よし、五秒後にF弾投擲』

F弾は音響閃光手榴弾で、敵の目と耳を一時的に潰すことができる。SDF隊員たちは耳栓を確認した。

直後、凄まじい音と光が男たちを襲つた。「うあつ！？」

孝はM4のトリガーを引いた。肩に反動が伝わり、ドットサイト越しに見ていた男の足から鮮血が散る。他の男たちも同様の運命を辿つた。

駆け寄り、手当り次第に倒れた男たちの持つ銃を蹴り飛ばしていく。

全員に手錠をかけ終わつた頃、パトカーと救急車が到着した。

その後、SDF隊員が総出で割れたガラス片の始末を行つた。ちょうど昼休みが始まつた頃に後始末が終わり、隊員たちは自分の教室に戻つていつた。

正午過ぎ、一年A組の教室では、昨日の五人が昼食をとつていた。

「そう言えば山崎、あんたSDFの試験受けたんじやなかつたつけ？」

と杏子。

「受けたよ。……普通に落ちたけど」

山崎はメロンパンにか

じつづく。

「……やつぱりね」

「やつぱりって酷くないか！？」

杏子は叫んだ山崎を無視し、お茶のペットボトルをぐいと呷った。いつも光景なので、孝は平然とした顔でミートスペゲティを口に運ぶ。葵は美菜と顔を見合させて苦笑していた。

「……にしても、中原さんって人気よねえ」

一同がきょとんとしたので、杏子は教室の入り口を田で示した。そちらを見ると、数人の男子生徒が廊下からこちらを見ていた。五人がそちらを見ると、彼らはあらぬ方向に視線を逸らす。全員、俗にいう美形の生徒だった。

「さつきから」いつち見てる。中原さん田でなんでしょうね」

「そんなことないよ」と葵は苦笑した。

「でも中原さん、この前うちの学校で一番かつて言われてるサッカー部の先輩に告白されたんだよね」

山崎の言葉に、孝は口に含んだ牛乳を吹き出しそうになつた。全く知らなかつた。

「何で山崎くん知つてるの！？」葵が驚いていた。

「もう噂で結構広まつてるよ？」と杏子。

「で、どうなつたの？」山崎が身を机に乗り出す。

孝は動搖を隠すためにミートスペゲティの残りを一気に詰め込んだ。

「断つたよ」

「何で！？」あの先輩性格も良いって評判なのに…」杏子は口角沫あわを飛ばす勢いだ。

「どうして断つたの？」山崎も意外そつだつた。

「うーん、……内緒。

あ、緒方ミートソースついてる」

葵はポケットティッシュを一枚取り出した。渡してくれるのかと思いきや、葵はそのまま孝の口を拭いた。

顔が近い。孝は硬直する。

「これでよし」葵は平然としている。

「……顔赤いわね、緒方」

そう言った杏子の顔が一ヤリとしていたので、孝は「気のせいだ、自販機行つてくる」と返し、席を立つて足早に教室から出た。

廊下から教室内を見ていた男子生徒の視線が刺さつたが、無視して自販機に向かった。

五月一日。

七限目の現代社会が終わり、孝は鞄に教科書やノートを入れた。鞄は学校指定ではないため、生徒は各自の嗜好に合わせて選んでいる。孝は黒いトートバッグを愛用していた。アメリカ製で、素材は防弾チョッキにも使われるバリスティックナイロン。少々値は張るが、実用一途、耐久性の高いバッグだった。容量も申し分なく、教科書やノート、夜間警備のための着替えなども入る。

「緒方、今日の警備って何時からだっけ？」

隣の席で、鞄を抱えた葵が問う。孝と葵はバディなので、警備のローテーションは全く同じだった。

二人一組のバディシステムは、全国のSDFで採用されている。普通部隊のバディはローテーションで組み替えるが、少数精銳のSSTでは、バディは固定されている。

「八時からだつたと思う

「それまで、予定ある？」

八時までは四時間ある。孝は家に帰つて適当に時間を潰すつもりだつたので、「ないよ」と答えた。

「じゃあ、ちょっと付き合つほしいんだけど……。あたし掃除当番だから、先にSST室で待つて

「ああ

葵は鞄を持って小走りに教室から出て行った。A組の掃除

当番は、確か職員室の係のはず。

掃除当番でない孝は、足早に教室を出た。

SDF棟に併設された射撃場で、葵は伏せ撃ちの姿勢でレミントンM24 SWS狙撃銃を構えていた。その隣で、片膝を床につけた孝は双眼鏡を覗く。

跳弾による被害防止のため、射撃場は側面、天井ともに分厚いコンクリートで囲まれている。

「修正、左二、下一」

「了解」

孝の指示で、葵はM24に載っているライフルスコープのダイヤルをわずかに回す。

そして、射撃を再開する。的は七十メートル先にある、同心円状に白線の入ったスチールプレート。

ちなみに隣の五十メートルレンジでは、新入隊員たちがMP5短機関銃の射撃訓練をしている。普通部隊のMP5は、ポピュラーなA5モデルで、衝撃弾を使う。ちなみにSSTには、衝撃弾より強い弱装弾を用いる、銃身を切り詰めたMP5クルツが配備されてもいる。

鋭い銃声と共に、プレートの中心点に着弾の火花が散った。SST専用の弱装弾では貫通こそしないが、的が凹む。定期的な交換は必須だ。

「……誤差なし。OK」

「はーい」

葵は立ち上がる、チーンバーに残った七・六一ミリ弾を抜いてケースに戻した。「ごめんね、付き合わせちゃって」

「別にいいよ。バディなんだし」

「……うん」

「あ、お姉ちゃん」

横を見ると、紺色の戦闘服に半長靴を履き、MP5を抱えた歩が立っていた。

美少女に戦闘服。

葵でもそうだが、ツインテールの歩だとさらにシユールな様相だった。

時代が生んだ光景、……といつのは仰々しいが、SDFF法施行前ならコスプレにしか見えない。

歩は孝に軽く会釈する。「こんなにちは

「お姉ちゃん、緒方さんと一緒に訓練してたんだ」「銃の照準を合わせてただけよ」

「……一人で、でしょ？」
「何が言いたいっ！」

葵が怒鳴ると、歩は舌を出して奥のレンジに走つていった。茶化す妹と、怒る姉。これはこれで均整のとれた姉妹の姿なのかもしれない、孝は一人で納得した。

SSST室の武器庫に銃を戻すと、午後六時を少し回つてい

た。葵は歩に射撃を教えると黙つて射撃場に残つてゐるので、孝はSST室のソファに腰掛け、勉強を始める。

孝の苦手——というほどではないが、他の教科に比べると点が低い——教科である古文の文法書を開く。孝は国語よりも数学が得意だった。答えがきつちり一つに決まるからだ。ちなみに、孝の所属するA組は理系のクラスである。

気がつくと、柴犬のテヅが足元で寝ていた。孝はその手触りの良い頭をひと撫でして立ち上がる。掛け時計を見ると、もう七時過ぎだつた。

「晩飯買^いに行くか……」

今日は泊まり込みの夜間警備なので、夕食を摂つておかなければならぬ。夜食も買つておきたい。近くのコンビニにでも行こうと思つてSST室を出ると、廊下に葵がいた。隣には歩。銃を手にする一人は、射撃場から戻つてきたところらしい。

「あ、緒方さん晩御飯今からですか?」

「うん」

「じゃ、三人で食べに行きません?」

「ちょ、ちょっと歩ー。」と驚く葵。

「おれはいいけど……」

「決まりですね。着替えて来るんでしょうかと待つてて下さい。お姉ちゃんも待つててね」

そう言つと、戦闘服の小柄な体躯が更衣室に駆けて行つた。

その後、三人で学校近くのファミレスに入つて夕食を食べた。歩が葵のことをペラペラ喋るので、孝は面白かった。実は雷が怖い、家では完全に天然、抱き枕がないと安眠できない、など。言われる度に葵は赤面していたが。

歩は帰宅するので、ファミレスの前で別れた。学校に戻ると、八時前だつた。

警備の引き継ぎを終え、夜間警備が始まつた。八時から朝の六時まで、交代で一時間おきに巡回を行う。睡眠時間は三時間、自由時間は一時間、残りは待機と巡回。育ち盛りの高校生には辛いタイムスケジュールだが、仕事なので仕方がない。

こういつた夜間警備が、週に一一度か三度割り当てられる。学校に残るのはSST隊員が四人と、普通隊員が六人となつていた。

SST室では、孝と葵、理香の三人で人生ゲームをしていた。理香のバディである三年の結城は、銃のメンテナンスをすると言つて工具室に籠つてゐる。結城は葵と同じくSST狙撃過程を修了しており、狙撃の腕は全国のSDF隊員でトップ五に入ると言われている。トップ二十の葵でも天才的な腕前だが、彼はそのさらに上を行つていた。

「あ、破産しちゃつた」

理香が顔をしかめた。

「借金ばかりするからですよ」

と言いつつ、孝はルーレット

を回して自動車を模したコマを進める。

「《某国のゲリラ部隊に襲撃され、車と財布を失う。所持金の八割を銀行に戻し、二十コマ戻る》……って何だよ」の人生ゲーム！」

「……独創的だね」

「もう止めましょ。あなたたち、もうすぐ巡回よね」

孝は午後九時の時刻を壁掛け時計に確認し、「そうですね」と返した。

三人は人生ゲームを手際よく片付けた。

孝と葵は、MP5クルツ短機関銃を持つて巡回に出た。クルツの弾倉には九ミリ弱装弾が装填されている。

巡回中でも照明はほとんど点けない。わずかな避難誘導灯だけだが、巡回に支障がない程度には照らされている。

「そついえば、来週遠足だよね」

廊下を歩いていると、葵が口を開いた。

「海浜公園だつけ？」

「うん、バーべキューするみたい」

微笑みながら話す葵の声は、いつもより弾んで聞こえた。

楽しみなのだろう。だが孝は単純に喜べない。このご時世、校外活動にはリスクが伴う。遠足や修学旅行中に事件に巻き込まれるのは日常茶飯事だった。そういう行事の場合は、学校敷地外でもSD

F隊員の銃器携帯が許可されている。

突然、葵が立ち止まつた。「ねえ緒方、……」

「ん?」

「なにこれ?」

葵が指差したのは、近くの自販機のそばに置かれた紙袋だつた。海外の某高級洋服ブランドのロゴが入つたそれは、場違いと印象を二人に与えた。

「なんか、黒い箱みたいなのが入つてる」

黒い箱? 孝もその紙袋を覗いた。

その瞬間、時間が停止したように感じた。

プラスチック製の箱から赤や青のコードが出て、年季の入つた旧式の携帯電話に繋がつている。

これは、爆弾だ。

孝は直感でそう断じた。

携帯がついているからにはタイマー式ではなく、遠隔操作式。

とすると、誰かがこちらを見ている?

一瞬の思考だつた。

孝は葵の手を引いて階段に駆けた。

直後、背後で着信音が響き、

膨れ上がつた爆音と爆風が背中を蹴り飛ばし、二人は階段を転げ落ちた。

SST室のソファで仮眠をとっていた理香は、突如発した爆音に飛び起きた。

「なに？」とー？』

思わず辺りを見回すと、結城が工具室から駆け戻ってきた。彼は手に持っていたM24を武器庫に放り、代わりにM4を取ってきた。「三沢、さつさと行くぞー！」

「ど、どー元?』

混乱している理香の声に、結城は端正な顔をわずかに歪めた。

「校舎で爆発だ！』

結城はボディアーマーも抗弾ヘルメットも身につけず、SST室を飛び出した。

腕と足が少し痛む。

火災警報のベルが耳朵じだを打っていた。

瞼を開けると、孝は自分が階段の踊り場にいることに気づいた。薄闇の踊り場に、葵も倒れている。

足音が迫り、白い闪光が踊り場を照らした。

「無事か！？」

M4のフラッシュライトを点灯させた結城が駆け寄ってきた。

孝は立ち上がり、自分の四肢が全てついていることを確めた。

「なんとか……」

葵も起き上がる。「いつたい何なの……」

「なにがあつた？」

「自販機の横に置いてあつた紙袋に、爆弾が入つてたんです」

「……なら、事故ではないな」

結城が眉間に皺を寄せた直後、理香がやつてきた。「大丈夫！」

「軽い打撲だけですよ」

孝は自販機の所に戻った。

紙袋は跡形もなく消え、付近の窓が全て割れていた。抗弾ガラスにも関わらず。

自販機は横倒しになつてあり、歪んで内部が露出していた。廊下の壁もところどころ抉れている。

横に立つた三人も絶句した。

あと少し遅ければ、死んでいた。

孝は心胆寒からしめられた思いで、その場に立ち尽くした。割れた窓から、夜風とサイレン音が流れ込んでいた。

第四話・助言（前書き）

はじめに、更新が大幅に遅れてしまつたことをお詫びします。やむを得ない事情でしたが、更新が滞る間の連絡をすべきだつたと反省しております。

五月一日、午前十一時。渡瀬は、理香と佐伯、結城の四人で高校近くの市立病院に来ていた。

坂丘高校は臨時休校となり、現在警察が実況見分を行つてゐるが、念のため、SDF隊員は交代で校舎の警備に就いている。

SDF隊員は、しばしば誰かの恨みを買う。それは戦闘で負傷したFDT隊員や、巻き添えを受けた一般生徒、あるいは彼らの家族などと、多岐に渡る。恨みを買えば、報復を受ける。最悪の場合、それは殺害という形で果たされることもある。

だが今回のように、プラスチック爆薬で爆殺（未遂ではあるが）というのは前例がない。警察は捜査本部を立ち上げ、早速犯人の特定を始めているらしい。

数日前、病室で緒方と中原に面会したが、二人とも打撲や捻挫程度で済んだので、精密検査の結果が出ればすぐにでも退院できるとのことだった。四人はとりあえず安堵の息をついて、病室をあとにしたのだった。

もう、仲間が死ぬのを見たくない。これは皆に共通した気持ちだろう、と渡瀬は思う。

一階に降りて廊下を歩いているとき、渡瀬は珍しく無口な理香に気づいた。「どうした？」

「どうしたって……。二人が殺されそうになつたのよ？ 今回はまたま助かったけど、また爆弾が仕掛けられたら……」 理香は悲痛な表情をしている。

「犯人なら、すぐ逮捕されるはずだ」

「どううな」 結城が相槌を打つた。

「なんで？」

「考へてもみる。プラスチック爆弾なんて素人が扱えるわけないだ

ろ？ 坂丘高校 SDF に恨みを持つて そうな人間をリストアップして、プラスチック爆薬を入手・使用でき そうな奴を絞り込めば、一発さ

渡瀬が説明したが、理香は訝しげに唸る。「でも、そんな簡単にバレるなら、最初から爆弾なんて使わないんじゃない？」

「衝動的な犯行……てことだろ？」

冷静な結城が言つと妙に説得力を感じるが、それでも理香は納得できなかつた。

限りなくゼロに近いが、渡瀬は考え得る他の可能性を口にしていた。

「まあ、テログループみたいな連中の犯行なら、捜査は難航するだろうな」

「それは難儀だな」 黙つていた佐伯が苦笑まじりに言つ。テログループが、いち高校の SDF 隊員の命を狙う道理はない。

犯人が誰であれ、検挙するのは警察の仕事だ。SDF の警察権が原則として学校敷地内に限定されている以上、今回の事件について渡瀬たちにできることはほとんど無い。

病院のエントランスから外に出ると、四人の前に一人の女が立つた。

長い髪を後ろで一本にまとめ、切れ長の目で四人の顔を見比べる。年齢は、二十代後半くらいだろうか。誰だ？ 渡瀬が当然の疑問を口にしようとするが、女はそれを封じるかのようなタイミングで「はじめまして、坂丘署の水橋と言います」

女 水橋美希巡査部長は、警察手帳を掲げて名乗つた。現行の二つ折り警察手帳は、手帳というより身分証と表現する方が正しい

か。写真の部分に印刷された旭日章のホログラムを確認して、それが本物だと判断した渡瀬は、「で、おれたちに何か?」と尋ねた。

「少し、話したいことがあるのだけど……」美希は事務的な微笑を浮かべたまま、渡瀬を見た。「来てもらつていいかな?」

部外者には聞かれたくない話、か。私服刑事がおれに、いつたい何の話だ?

脳に沸き上がる疑問符を押し殺し、渡瀬は三人に先に戻るよう言つていた。

美希がハンドルを握るマツダRX-8は、警察車両ではなく、彼女の私有車らしい。

走り出して早々、助手席の渡瀬は口を開いた。「それで、話とうのは?」

「昨夜の爆発事件についてのことよ」

予想通りの回答だったので、渡瀬は驚かない。「……続きを

「まず、犯人が判明したわ。建設会社勤務の、溝川雄治みぞかわゆうじつて男で、父子家庭の父よ。彼の一人息子は去年、FDTの一員として坂丘高校を襲撃した際、SDF隊員に撃たれて出血多量で死亡」

つまり、息子の復讐のために、爆弾を仕掛けたということとか。建設会社に勤めていれば、役職によつては爆薬が手に入るし、扱いも

慣れているだろ？。

国道に入り、RX-8がスピードを増す。渡瀬は軽い加速度を知覚した。

「溝川は今朝、自宅で死んでいたわ」

SDFに復讐しようとして、罪悪感に苛まれて自殺。これまで何度も発生しているケースだ。

「問題は、ふたつある」

渡瀬は、ちらと美希を見遣つた。彼女は正面を見据えたまま言葉を繋ぐ。

「ひとつ目。溝川は昨日、会社から四トンのプラスチック爆薬を盗み出した」

「四トン…？」

渡瀬は思わず大声を出した。昨日使われた爆薬は、せいぜい数キログラム。対人殺傷ならその程度で充分だ。

四トンもの爆薬、いつたい何に使うつもりで……？

「ふたつ目。溝川は自殺でなく、殺されていたということ。盗まれた爆薬は、所在不明になつているわ」

「それは、つまり……」

「何者か”が、溝川を利用して大量の爆薬を入手したってこと」

渡瀬は軽い目眩を覚えた。四トンものプラスチック爆薬の使い道なんて、テロくらいしか思い浮かばない。

誰が、何のために？

この刑事がそのことをわざわざおれに話した理由は？
そもそもこれは、SDFに関係のある話なのか？

渡瀬は飽和状態の情報を強制的に整理し、いま最も知りたいことを聞いた。

「……なぜそんなことを、おれに？」

「いま私が話したことは、パニック防止のため一般には公表されないわ。無論、あなたたちSDF隊員にもね。

爆薬を入手した”何者か”が、あなたたちSDFに敵意を持つているとは限らないわ。ただ、警察官としていろいろ調べていると、最近のFDTには不可思議な所があるのよ。これは勘だけど、何か、水面下で恐ろしいことを始めているよつな……。

だから、あなたたちには、最大限の注意を払ってほしい。私が言いたかつたのはそれだけ」

RX-8は、いつのまにか坂丘高校の校門前に到着していた。

「これは……なんて言ひのかな、元SSTとしての助言よ」
○G
アドバイス

渡瀬は礼を述べて、RX-8から降りた。

昨夜の爆発で割れた窓を一瞥してから、SDF棟に向けて歩き出す。

四トンの爆薬の矛先が、SDFに向いているのだとしたら
その矛を、へし折つてやるまでだ。

その三日後、坂丘高校は授業を再開し、孝と葵はSSTに復帰した。

- 『泥酔した大学生の兄、中学生の妹を射殺』
- 『中央公園で不良グループが銃撃戦 十六人死傷』
- 『高校生コンビニ強盗 店員を射殺』
- 『痴漢、OLに撃たれ全治三ヶ月 正当防衛か』
- 『高校生が同級生五人を射殺 原因はいじめの恨み』

大手ポータルサイトのニュース欄を席巻する、銃器に関連した事件。似たような事件は過去に何度も起きており、わざわざ詳細を確認する気も起きない。この国が治安国家と評されていたのは、とうに昔の話だ。銃大国となつた日本に辟易しながらも、そこで生きてゆくしかない現状を再確認した孝は、もはや異常とは呼べなくなつた異常の数々を表示するパソコンの液晶画面から視線を逸らした。

娯楽用として、SST室に一台のみ設置されているデスクトップ・パソコンは、機械関係に造詣が深い佐伯さえきがパーツから自作した代物だった。ディスプレイから無数の配線が伸び、電源ユニットやらHDDに剥き出しで接続されている外見は不格好としか言いようがないが、パソコンとしての性能はかなり良いようで、ゲームソフトや動画ファイルが大量にインストールされているにも関わらず、ブラウザの表示はロスタイムがほとんどない。実用上唯一の欠点と言えば、ユニット全体が放送出する熱が多いことで、孝は一度パソコンをスリープ状態にし、パソコンデスクから離れた。

午後十時十七分の時刻を壁掛け時計に確かめ、一人掛けの革製ソファに腰を沈めると、どつと眠気が押し寄せてきた。

携帯電話をテーブルに置き、足元に寄つてきた柴犬のテツの頭をひと撫でてから、瞼まぶたを閉じる。

疲れているのだろう。孝は自分のコンディションについて、そう

判断した。

爆弾事件のあと、一つ離れた市に住んでいた両親と祖父母が見舞いにきた。当然と言えば当然かもしれないが、孝はＳＤＦを辞めるよう懇願された。兄が死に、唯一の息子となっている孝が死にかけたのだから、両親と祖父母の言葉にこれまでにない熱がこもつていたのは納得できる。

だからこそ、孝が両親たちを説得するのは困難で、心身ともに想像以上の負担を強いられたのだ。

なぜ、そこまでして戦う？ もう一人の自分が訊いてくる。
金のため、ではない。それは断言できる。確かにＳＤＦ隊員としての収入は役に立っているが、仕送りだけでも生活には不自由しない。それに、安全なアルバイトなら他にいくつもある。では、なぜだ？

銃が氾濫する浮き世に対する正義感？

兄さんの敵討ち？
それとも

「ふう、やっと終わった」

ドアを開く音と共に発した声が、孝の意識を現実に引き戻した。
聞き慣れた相棒バディの声。孝はゆっくりと目を開いた。

左肩と左胸にＳＤＦ章が縫い込まれたセーラー服に身を包んだ葵は、銃のメンテナンスを終えたらしい。武器庫のドアの前から孝の方に歩いてきた。そのままソファの後ろに立つと、孝の顔を覗き込むようにしてくる。

「お疲れのかな？ 緒方くんは

多少おどけて言った葵に、孝は「……よく分かるな」と氣の抜けた返事をした。頭がぼんやりしていた。

葵はふふと笑う。「だてにパーティやってませんから」

「なるほど」孝も笑った。自然に笑えたのは数日ぶりだと思つ。

葵はSST室の角に置かれたメタルラックに向かい、コーヒー力
ツプふたつを取り出し、インスタントコーヒーを入れ、ポットの湯
を注いだ。孝の隣に腰掛け、片方のカップを孝の前に置く。「まあ、
コーヒーでも飲みなよ」

「ありがとう」言つてから、孝はコーヒーを一口啜つた。ほどよ
い苦みが口に広がる。「中原」

「うん?」

「親に、なんて言われた?」爆弾事件のことだといつことは、暗
黙のうちに通じるだろ?」

「辞める、つてさ」葵は、両手で握ったコーヒーカップに視線を
落とした。「緒方の方は?」

「同じく

「……辞めないよね?」数秒の沈黙を挟んで、葵は問うた。

孝は微笑を浮かべる。「もちろん」

爆弾事件のあと、数人のSDF隊員が辞職していた。この前代未
聞の事件に、坂丘高校だけでなく、全国の高校のSDFでも辞表を
書く隊員が出ているという。幸いSSTから辞職者は出なかつたが、
SDF隊員を殺害する目的の事件が起きたのだから、辞める者が出
るのは不思議ではない。むしろ賢明と言つてもいいくらいだ。

成人すらしていない子供が、大人のエゴのせいで命を落とすなん
て、虚しすぎる。

葵は真剣な表情を少しだけ崩し、僅かな笑みを浮かべた。「よか
つた」

「あたしも、辞めない」

そう言つた葵の瞳は、堅い意思の色を宿しているように見えた。だが、その言葉に孝は手放しで喜べなかつた。

おれは、葵に辞めてほしいと思つてゐるのか？

なぜ。バディに辞められたら困るのはおれじやないか。

葵がSDF隊員として危険に身を晒^{さらす}していることが、嫌なのか？

唐突にSST室に響いた警報音が、孝の思考を終わらせた。

侵入者。

反射的に、壁につけられたモニターに目をやつた。学校に多数設置された監視カメラのひとつが映つており、ひとつの人影が校舎の周りを走りながら、侵入する場所を探してゐるようだつた。動きからして、相当焦つてゐるらしい。見える限り、銃も持つていない。

二人は、戦闘服とボディアーマー、鉄帽^{テッパチ}に身を包み、MP5Kサブマシンガンを携えてSST室を出た。

SDF棟から出て、月明かりのもと、校舎とグラウンドの間を進む。

突撃銃^{アサルトライフル}でもない限り、抗弾ガラスを備える校舎に侵入するのは不可能だ。

侵入者は、あつさりと見つかった。一階にある教室の窓を割りうつと、コンクリートブロックを振りかぶつていた。

「SDFだ！ 動くな！」 孝はクルツを即時射撃位置で構え、怒鳴つた。

フラッシュライトに照らされた侵入者はパークーにジーパンといふ出で立ちの少年だつた。中学生かもしけない。顔には、切り傷や青あざがいくつか見える。

逃げようとした途端に威嚇射撃するつもりだったが、少年は「コンクリートブロックを放り捨て、「た、助けて下さい！」と泣きそうな声で喚き、駆け寄ってきた。まるでなにかから逃げているようだ。

「止まれ！ 両手を挙げろ！」

クルツの銃口に気づいて少年は足を止め、大げさに両手を挙げた。葵が警戒するなか、孝は少年が武器を持っていないかチェックした。パークーのポケットから、バタフライナイフが出てきたので没収する。

ボディチェックが済むと、葵はようやくクルツの銃口を下ろす。

「助けて、つてどういうこと？」 葵が少年に訊く。

「ぼ、暴力団に追われてるんです。すぐそこまで来てるはずです！」

少年が言った直後、SDF棟の方から複数の足音が響いてきた。警報を聞いて駆けつけたSDF隊員 ではないようだ。

裏口から侵入したのだろう。十人ほどの男が走ってくるのが見えた。手には拳銃らしい物体が握られている。「いたぞ！」「逃がすな！」

相手が多すぎる。正面玄関の方に向かおうと考えたが、そちらからも武装した集団が近づいていた。

暴力団の挟み撃ち。孝は舌打ちする。

とにかく校舎に入るため、孝は「非常口から入るぞ！」 と言つて走り出す。

三人は校舎と体育館の間に入った。そこに非常階段の出口がある。暴力団の数人が発砲してきた。照準はでたらめ。

葵が解錠を始める。

孝は応射のトリガーを引いた。

フルオートで吐き出された九ミリ弱装弾が、接近しつつあつた暴

力団員の足元のアスファルトを抉り飛ばす。その団員が慌てて後退するのを横目に、別の方向にも威嚇射撃。

「緒方、早く！」

振り返ると、葵が非常口のドアを開けて待っていた。少年はすでに校舎に入つたらしい。孝は最後の掃射で弾倉（スガシ）を空にして、非常口に駆け込んだ。

非常ドアもそれなり以上に頑丈に作られているが、大量の銃弾に持ちこたえられる保証はない。小銃弾でもびくともしないドアを作ることも可能だが、非常時の消火・救難活動に支障が出るため法律上禁止されている。

「ここだ！」「早くぶち壊せ！」「鍵だ、鍵を擊て！」「ドアの外から怒号と銃声が響いてきた。

三人は階段を駆け上がり、最上階の五階まで上った。

本来、学校敷地内への不法侵入者は警告したのち、従わなければ逮捕するが、今回は銃で武装しているし、数が多くすぎる。対してこちらは夜間警備の人数しかいない。警察の協力が必要かもしない。まずは、自分たちの安全を確保しなければ。廊下を歩きつつ、孝は籠城に適した場所を考える。

『緒方と葵、聞こえる?』

突然イヤホンを震わせた理香の声に、葵は「聞こえます！」と返した。孝たちと同じく夜間警備に就いている理香と結城は仮眠時間中だが、先刻の警報と銃声で起きたのだろう。

『外は随分と賑やかみたいだけど、状況は?』

「外にいる暴力団から少年ひとりを保護。校舎に侵入されそうなので、これから五階に籠城します」 孝はなるべく簡潔に答える。

『了解。いまSDF棟には、わたしと結城、普通部隊の六人がいるわ。校舎内に巡回中の隊員はなし。渡り廊下に武装した連中がいて、そちらに行く場合は戦闘になるわね』

「連中の武器は拳銃がほとんどですが、人数が多い。強行突破も視野に入れといて下さい」

『そうね。でもとりあえずは情報収集を優先させるわ』

「分かりました」

通信が終わり、とりあえず理科実験準備室に入った。理科実験室の隣にあるこの小さな部屋は、理科系の実験器具を置いておく場所だ。孝はカーテンを閉めて外と廊下に光が漏れないようにしたあと、照明をつけた。

棚には薬品やビーカーが並び、他にも顕微鏡や試験管が所狭しと置いてあつた。古びた人体模型が不気味だ。化学薬品の臭いが鼻につくが、もつとも籠城に適しているのはここだから仕方ない。三人は、室内にあつた簡素な丸椅子に腰掛けた。

「さて、説明してもらえるかな?」

孝は少年に訊いた。当然の質問だった。

少年は数秒間経つてから、視線を下げたまま口を開いた。

「嫌になつたんです」 少年の声は、わずかに震えていた。「おれは、あの暴力団の下っ端です。でも、抜け出してきたんです」

少年は語り出した。名前は栗野浩太郎。^{くりのりょうたろう}この前高校生になつたばかりだが（坂丘高校の生徒ではない）、親の暴行に耐えかねて家を出た。持ち出した現金は数日で使い果たし、放浪していたところを

暴力団 青豹^{あおひょう}といふらしに に助けられた。『仲間になれば、居場所と力を与えてやる』 と。

「でも、あいつら、平氣で罪のない人を殺すんです。犯罪現場を見られた、という理由で。ひどいときは、憂さ晴らしで撃ち殺すような人もいます」

民間に銃が流通して以来、その手の事件が途絶えたことはない。おかげで、人員を二割増しした警察でさえも手に負えなくなつていい。人員・装備が拡充された機動隊や銃器対策部隊、特殊犯捜査係^{S I T}、特殊急襲部隊^{A T}は年中出動がかかつてているという。そんな警察に余裕はない。だからこそ、孝たちSDFが存在しているのだが。

「それで、耐え切れなくなつて逃げ出したんです。脱走者は射殺されるんで、保険として人事データを盗んできました」

「そりや逆効果だろ」

「へ？」 孝のツツ^{ツツ}ミニに、得意げな顔だつた栗野は間抜けな声を出す。

「きみがそんなデータを盗んできたから、青豹はあんな大人數でみを追つてるんだよ？」 葵が分かりやすく説明する。「おかげであたしたちがその相手をしなくちゃいけない」

「すみません……。本当は一人で逃げ切るつもりだったんですけど、途中で追いつかれて、たまたまこの高校があつたのですから」

「SDFは警察じやないぞ」 孝は呆れ顔だつた。

「でも、高校生を守るのが仕事でしょ？」

なにかずれている気がするが、その通りなので、返答に困る。孝は顔をしかめ、ため息をついた。そして、栗野から没収したバタフライナイフをポケットから出して掲げた。「なんにせよ、おまえの行為は不法侵入だし、こいつの刃渡りだと銃刀法違反も追加だ。警

察には行つてもうつからな? まあ、軽い罪さ」

栗野はがつぐつと肩を垂れ、小さく頷いた。

「なにをしている。さつさとガキを殺してデータを持ち帰れ!」

その声は、薄暗い書斎にやけに大きく響いた。青豹のリーダー、柳浦征夫は受話器を握る右手に不必要的力を加えた。

『申し訳ありません。栗野は坂丘高校のSDFに保護されました。ドアを破壊し次第、われわれも校舎に突入します』

「もういい、これから”狼”の数人を向かわせる。到着次第、彼らの指揮下に入れ」

『は、”狼”!? いえ、警備に就いている高校生は少数です、われわれだけでも充分……』

「きみにはまだ伝えていなかつたな。盗られたデータは人事についてのものだが、暗号ファイルで別のデータが隠してある。青豹の根幹が揺らぐような重大情報がな」

『はあ……なるほど』

「高校にいる学生を抹殺してでも持ち帰れ。いいな」

『分かりました』

柳浦は、相手の返答を聞き終えずに受話器を耳から離し、通話を終えた。

書斎の入口で控えている部下に丸い顔を向ける。

“狼”から三人を選抜して坂丘高校に向かわせろ。手段は任意、
なにをしてでもデータを奪還せろ」
「はい」 部下は静かに書斎から出て行つた。

青豹の暗殺部隊、”狼”。身寄りのない子供に高度な殺人術を叩
き込んで組織した、殺人マシンの集団。

これで、事件は解決したも同然だ。柳浦は白髪混じりの頭を搔い
てから、本革のソファにどつかりと腰を沈め、口の端を吊り上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9680q/>

高校内乱

2011年10月9日16時51分発行